

「饅頭を喰いたい」という要求に完全側臥位法で応える

伊勢民主診療所 堀内功一

患者さんは妻との二人暮らし。娘が同一敷地内別棟に暮らす。平成 26 年 6 月に患者さんの兄が病院で死亡し、家族には「1 回でも大好きだった風呂に入れてあげたかった」との思いを残した。

患者さんは 81 歳、認知症と慢性閉塞性肺疾患の末期。平成 27 年 4 月 22 日昼食中に呼吸ができなくなり、救急搬送された。気管支鏡で白身魚が取り出され、誤嚥性肺炎の治療を受けた。5 月 13 日に胃ろう造設、絶飲食にしても入院中に 4 回の誤嚥性肺炎を起こした。患者さんと家族には「できるならば家で」の気持ちが強くなり 8 月 1 日に退院した。「数日間は要注意。盆を越すことはない」という予想で、妻はパートを続け、娘は定休日以外店に出るという自然な在宅見取りの生活が始まった。

しかし患者さんには不満があった。「何でうちに帰ったのに、饅頭が喰えんのだや」。咽頭反射が消失していたが、嚥下反射は保たれていた。8 月 8 日に誤嚥性肺炎（疑）があり、状態が落ち着いた 9 月 9 日に右完全側臥位で水羊羹 1 匙を頬粘膜に入れ、嚥下を繰り返していただいた。呼吸数と経皮酸素飽和度をモニターした。経口実施前の吸引で経腸栄養剤が引けたが、実施後には白色の粘調痰のみで水羊羹は完全に嚥下されていた。

患者さんの ADL によるが、この方法では「完全」を追求するポジショニングが成功につながる大きな要素だと考えた。